

かがやく

ハーモニーひたちなか

第18号
2015.3発行
編集/発行
ハーモニーひたちなか
ひたちなか市女性生活課

男女共同参画強調月間事業

テーマ 「未来へと 男女でつなぐ 道しるべ」

市では、男女共同参画社会の実現に向けて、市民及び事業者の関心と理解を深めるとともに、男女共同参画の推進に関する活動が積極的に実施されるよう、毎年11月を「男女共同参画強調月間」と定め、啓発事業を実施しています。

平成26年度は月間テーマを「未来へと 男女でつなぐ 道しるべ」とし、男女共同参画を推進する団体のネットワークである「ハーモニーひたちなか」と協働で啓発事業を行いました。



▲ハーモニーフェスタ 2014 会場



▲口笛コンサート



▲各イベントの様子



市民の皆さんに楽しみながら男女共同参画を知っていただこうと、ハーモニーフェスタ2014が行われました。当日の会場は男女共同参画に関するアンケートや家族で楽しめるワークショップ、ミニステージでの催し物などが行われました。またハーモニーひたちなかの活動紹介、女性の人権に関するパネルが展示され、来場者に知識を深めていただきました。

ハーモニーフェスタ2014
日にち 平成26年11月2日(日)
ところ 市総合体育館サブアリーナ

●男女共同参画市民意識調査●

フェスタ会場でアンケートに答えていただきました。



Q 女性が働き男性が専業で家の事をする選択についてどう思いますか？

「良いと思う」男性は **58%**

「困る」女性は **67%**

・男性は「自分は専業主夫に向いていると思う」「なりたい！」という積極的な意見から、「妻からの理由に納得すれば仕事を辞めて、専業主夫になっても良い」というものまで様々な意見がありました。

・「困る」と答えた女性は、経済面から現実的に無理と考えてしまうのでしょうか…。

Q 配偶者控除が廃止されることで女性の働き方が変わると思いますか？

・男性より女性の方が「変わる」と考えている人が多い。

「変わらざるを得ないんじゃないかなあ〜」(男性)

「女性も社会の一員。控除が無くなれば家計のために働く人も増えると思う」(女性)

Q 女性が管理職やリーダーになることをどう思いますか？

・男女共に賛成が大多数。中には「研修を受けて力が付いたら管理職になってみたい」(女性)という前向きな意見も！

女性もリーダーとして生き生きと活躍する社会になればいいと思います。



会場では、子どもたちから両親に「ありがとう」などの感謝のメッセージがクリスマスツリーにたくさん飾られました。

●育メン・家事男・育ジイ集まれ●

来場した方に多くの応援メッセージをいただきました。



性別にこだわらず家庭や職場、地域で生き生きと活動している男女共同参画をイメージするたくさんの写真が集まりました。

みなさんからの応援メッセージ

- ・パパの笑顔がステキ！
- ・パパとお風呂は最高だね。
- ・料理のできる男子はモテるよ。
- ・えらいね。ごはんがとてもおいしそう！



パパこれからもよろしくね！ がんばれ〜！家事男



フェスタ参加者の声

- ・私たちの時代にはなかったことなので、男女共同参画社会が進むことは女性にとってとても嬉しいことです。
- ・すてきな活動ですね。
- ・イクメンの写真がもっと集まると良かったですね。おもしろいテーマです。

今年度初めて家事・育児などで活躍する方の写真展を開催しましたが、さまざまな年代に男女共同参画が受け入れられている手ごたえを感じました。

ハーモニーひたちなかフォーラム

日にち 平成 26 年 11 月 30 日 (日) ところ ワークプラザ勝田

講演会

「野口雨情のこころを伝えて」 講師 野口不二子さん



講演会では詩人野口雨情の様々な詩の背景と思いについての話がありました。童謡「七つの子」については“可愛い七つの子”は七羽の雛のことでなく数え年七つになる息子のことでした。雨情はこの息子と山で植林をした思い出を元にこの詩を書きました。そして杉の苗を植えながら「木が大きくなるには何十年何百年もかかる。人も目先だけのことを考えずに二十年三十年先、孫子の代のことまで考えて生きるのだよ。」と諭したとのことでした。また、講師は雨情生家で東日本

大震災に遭い、津波から雨情の資料を救うために何度も二階へ運び上げ、手紙類を背負って避難しました。一夜明けて被害に遭った生家へ戻り片づけをしたそうです。お話を伺って自立した女性の強さと冷静さ、雨情への深い愛を感じました。

講師は女性であっても自分の意思を持って行動する大切さを話され、女性にエールを送る素晴らしい講演会となりました。

野口不二子さんプロフィール

北茨城市生まれ。野口雨情の直孫として、日本人の心の原点である童謡の普及を行っています。また、男女共同参画に関する活動にも尽力されています。

男女共同参画推進事業所表彰

男女が共に働きやすい職場環境づくりに取り組んでいる次の3事業所が表彰されました。(50音順)

＜新熱工業 株式会社＞ (山崎)

育児・看護休業のほか子どもの看護休暇と介護休暇制度を設けており、仕事と家庭生活の両立を支援する取り組みをしています。

＜株式会社 SAYコンピュータ＞ (高場)

女性がプロジェクトリーダーになるなど、女性の能力発揮向上のための取り組みを積極的に行っています。また職員のスキルアップを支援し、職域の拡大に取り組んでいます。

＜社会福祉法人 はまぎくの会＞ (柳沢)

全ての職員に管理職を目指す機会が与えられており、女性の採用や非正規雇用から正規雇用の転換に積極的に取り組んでいます。



男女共同参画に関する作品表彰

男女共同参画社会の実現を親しみやすくイメージした404作品の応募がありました。男女共同参画審議会と市が選定した結果、次の6名が表彰されました。最優秀作品は次年度の男女共同参画強調月間のテーマとして啓発に活用します。

- | | | |
|--------|---------------------|--------|
| ＜最優秀作＞ | 「責任を 男女で分け合う 支え合う」 | 平澤真規さん |
| ＜優秀作＞ | 「はじまりは 1人を認めるところから」 | 福田瑠夏さん |
| | 「男女の理解 大切なのは 思いやり」 | 浜田敏弥さん |
| ＜佳作＞ | 「イクメンの役割果たして イクメンに」 | 田中松美さん |
| | 「男女で かがやく明日を 生み出そう」 | 伊藤春奈さん |
| | 「男女とも 心をつないで 未来へ進む」 | 河合翔太さん |



素敵な老後の暮らし方 ～シリーズ高齢期の過ごし方⑧～

今回は、NPO法人で相談業務を行い、充実した生活を送る渡邊憲一さんから寄稿いただきました。

人生には不慮の災難というものがある。地震、津波、そして予期せぬ病気もその一つだ。

定年退職を迎える3月、東日本大震災を経験したことで、自分の人生、自分の時間は自分で管理する自由人になりたい…これからの人生でいちばん大事なことは、いかに楽しむかであると思った。「誰にも平等にある24時間を自分のものにする」これを実現するために、仕事や団体・組織の活動をやめて、日程は自分が計画し、趣味を限定して、今までやらなかったことに挑戦することにした。

しかし退職してからは、母のがんの経過観察、長女の就職と結婚・出産、次女の大学生活と就職、妻の思いもよらない病、義母の圧迫骨折と人工透析など家族と関わった時間がほとんどであった。

そのような生活を3年9か月経てやっと自分の時間に余裕が出てきた。今は市民交流センター2階多目的室を利用しているNPO法人おいもジョポットで「困った相談室」のボランティア相談スタッフとして活動している。なぜなら、社会のすきま的な活動に参加したいと考えたからである。

相談者に解決の糸口と手順を説明し、理解し納得して帰っていただける時は、スタッフの1人として何よりも嬉しい。

◆「困った相談室」

毎週水曜日（第5週を除く）午後5時30分から午後7時30分。相談は無料。



男女共同参画講座

「地域を創る ～誰もが生まれてきて よかったといえる社会へ～」

講師の天野さんは、福島県庁の元職員で、先の東日本大震災で避難所の運営に関わりました。講師は大震災から得た教訓や知見から、災害支援に必要な力は「想像力」であったと明言しています。

講師が携わった郡山市にある県のコンベンション施設「ビッグパレットふくしま」が大規模避難所に指定された当時、3,000人を超える人たちが避難していました。情報の共有がなく、各部門が縦割りで支援にあたっていたなどの要因で、避難所は危機的な状況にあったそうです。それを変えていったのは、「交流」の場の提供と自治活動の促進でした。避難者自らが足湯やサロン（喫茶スペース）の運営に取り組むことで、無事に避難所を

日にち 平成27年1月27日（火）
ところ ワークプラザ勝田
講師 天野和彦さん（特任准教授）
福島大学
うつくしまふくしま未来支援センター

閉じることができたそうです。

福島での災害の特徴には、津波・地震だけでなく、原子力災害という二重のくびき（障碍）がありました。そして震災での直接死より震災関連死が他県の倍以上になっていました。講師は大震災で希望を失った人たち、未来を描けない子供たちの様子から、寂しいと人は死ぬということを知ったといいます。また、自身の体験から災害時には生命を守る活動を縦軸に、生きがいと居場所づくりの援助を横軸として、交流の場の提供と自治活動を促進し、人と人とが繋がる仕組みが大切だと話されました。「普段準備している以上のことはできない」この言葉が心に残る講座でした。

9月に旧友から「娘に
女兒誕生！」と微笑まし
い写真メールが届きまし
た。しかしその翌月に訃
報が届き、実は彼女の
主人は初孫に会えず、67
年の生涯を閉じていたこ
とを知りました。

大震災の年に、医者で
ある本人が自らの肺癌を
発見し、近親者にもみ告
知し、家族と共に残され
た時間を愛おしみ仕事も
続けていました。

夫婦と同僚で生前に話
し合って決めた偲ぶ会は
故人の遺志どおりに明る
く楽しい服装で皆が集り
ました。天職に恵まれ良
き職場を得、心優しき
人々に囲まれ、最後まで
ダンディーなスタイルを
貫き、家族に深い愛情と
思い出を残して旅立った
彼。その生き方に大きな
拍手を送り、秋風吹く中
を皆が温かい想いを胸に
帰路につききました。

(H・T)



編
集
後
記